

高校生の卒業研究に関する事例分析

—中高一貫校の執筆者の質問紙調査から—

崔英姫[†] 根本彰[†]

[†]東京大学大学院教育学研究科 生涯学習基盤経営コース

本稿は、高校生が取り組む「卒業研究」の事例を挙げて、卒業研究で要求される論文を執筆した生徒の視点から、探究型学習の現状を把握し、その抱える課題について考察することを目的とする。調査のため、卒業研究が高校卒業の要件である中高一貫校 A 校を選定し、高校生の執筆者を対象にアンケートを実施した。調査結果、A 校の卒業研究に見られる探究型学習は、現実社会との連帯を意図した体験的な探究活動を重視する特徴をもち、執筆者にとって自己主導的な学習を行ったという肯定的評価に結びつく教育効果をもつことが分かった。卒業研究の課題としては、論文作成についてのより明確な指導法の確立、テーマ設定や情報の探索・利用時に必要な情報リテラシーの育成、学習過程全般にわたる情緒的支援の必要性が示唆された。

キーワード：卒業研究，探究型学習，総合学習

目次

1 研究の背景及び目的

2 研究の枠組み

- 2.1 事例の選定
- 2.2 研究方法

3 データの構成

- 3.1 学校の概要
- 3.2 卒業研究の体制と特徴
- 3.3 質問紙の構成

4 調査の結果及び分析

- 4.1 テーマ設定プロセス及び研究方法
- 4.2 文献資料の利用現況
- 4.3 教育的効果
- 4.4 抱える課題

5 まとめと今後の課題

1 研究の背景及び目的

高校の探究型学習カリキュラムの根拠となる現行学習指導要領(高校は 2009 年告示, 2013

年から順次実施)は、知識基盤型社会及びグローバル化時代に対応できる自己主導的な学習能力の伸張に力点を置いており、これを実現するために、主に 2000 年に新設された「総合的な学習の時間」を通して、横断的・総合的な学習と探究的な学習を行うことが明示されている。「総合的な学習の時間」とは、教育課程における時間種別を表す用語であり、この時間枠で行われる教育・学習活動は、一般的に「総合学習」と呼ばれている。

公立高校の「総合的な学習の時間」で展開されている総合学習の内容及び形式について検討した森(2003)によると、「体験学習型」(例：車椅子体験・施設体験・華道など)、「進路ガイダンス型」(例：進路講演・適性検査・小論文・自分史作成など)、「講座・テーマ型」(教師の特色や教科の分野を中心に講座や調べ学習・テーマ学習などを展開)の 3 つのタイプがあり¹⁾、それ以外にも、地域学習や作品制作(ものづくり)など挙げることができる。また、このような総合学習を、個人をベースにした課題研究へ発展させたものとして「卒業研究」がある一方、2002 年スーパーサイエンス・ハイスクール(SSH)の導入以来、「総合的な学習の時間」

を代替する新たな形式として²の理科・数学中心の「探究型学習」も行われている。

昨今の指導要領改訂の解説において、「探究」の学習活動が「習得」と「活用」の学習活動と並んで位置づけられており、体験的な学習に配慮しつつ探究的な学習の充実を図ることが求められ、探究的な学習は総合的な学習の時間の必要条件となっている³。

ところが、日本の中等教育における探究型学習についての実践報告は散見されるものの、理論的な根拠が乏しく、欧米の学習スキルの応用や提言に留まっており⁴、その歴史的な展開と教育現実にそった探究型学習の様相及び学習プロセスについて考察した研究はほとんど見当たらない。

一方、高校の「卒業論文」「卒業研究」カリキュラムの事例を挙げて、総合学習または探究型学習を論じている研究が存在する⁵。卒業研究の過程は、生徒が自ら課題を発見し、その課題を解決するために基礎知識と技術を習得し、多様な探究活動を通じて自分なりの結論を出して、一つの「論文」でまとめて発表するものである。卒業研究に着目した研究が登場した理由には、それを卒業や進学要件としている学校が増えている状況がある。だが、そうした先行研究は、日本の高校における卒業研究のカリキュラム上の特徴と、卒業研究が持つ教育的意義及び課題を共通的に論じているが、卒業研究の学習過程上必須とされる探究型学習の様相と、この学習で特徴的に求められる能力を全体的に考察した論考になってはいない。

そこで、本稿では、東京都内にある中高一貫校の卒業研究の事例を挙げて、卒業研究で要求されている論文を執筆した生徒側の視点から、A校の卒業研究に見られる探究型学習の特徴を究明し、卒業研究の抱える課題について考察する。具体的には次の二つの研究課題に取り組む。一つは、A校の卒業研究を通して実践されている探究型学習は他の教育方法と比べてどのような特徴があるかということであり、もう一つは、卒業研究に取り組む生徒たちが経験する学習上の困難や、卒業研究の指導上の課題はどのようなものであるかということである。

2 研究の枠組み

2.1 事例の選定

2000年以後、「卒業論文」「卒業研究」をカリキュラムに導入した高等学校が増えてきている。大貫・竹林の2008年度の調査では、ホームページ上で「卒業論文」を導入していると表記している高等学校は全国に154校あり、「卒業研究」やそのほかの名称を用いて「論文」を果たしている高校は相当数あると推測している⁶。

そのなかでA校の事例を取り上げた理由は次の通りである。まず、卒業研究が普通科に所属する生徒全員の卒業要件となっている点である。私立大学附属高校では大学進学要件として卒業研究が課されている例があるが、A校では、進学とは全く別の教育課程として卒業研究が課される。同じ学年の生徒全員が卒業研究を行うために、探究型学習に対する多様性に富んだ考えを浮かび上がらせる可能性がある。次に、卒業研究のカリキュラムが安定性を有していることである。A校における卒業研究の導入時期は1983年であり、種々の修正を経て、現在のカリキュラムになっている。その当時から、総合的な学習を2学年ごとに、発展的に学習能力を身につけて最後に卒業研究でまとめられるように設計している。指導体制や実践内容において安定したものが実施されているといえる。

2.2 研究方法

質問紙構成のためには、卒業研究に関わる学校・授業レベルのカリキュラム調査、教員の教授法、学習過程、卒業研究の論文及び作品、学校図書館の現況などを全般的に把握する必要があった。そこで、先行研究の文献調査以外に、卒業研究関連授業の参与観察、卒業研究の論文及び作品の検討、卒業研究に用いられる教材の分析、学校図書館への訪問調査を行った。

3 データの構成

3.1 学校の概要

A 校は東京都内にある中高一貫学校で男女共学である。1 学年に 3 クラスあり生徒数は約 120 人で、全生徒数は 6 学年で約 700 人であり、すべて普通科である。

1948 年新制高校へ移行し、中高一貫校として開設された。1963 年中学入学に筆記試験を取り入れ、6 ヶ年一貫教育を成立した。1966 年高校での募集を停止し、完全中高一貫教育体制となる。これに伴い、2・2・2 制の教育体制が検討され、中 1・中 2<基礎期>—中 3・高 1<充実期>—高 2・高 3<発展期>の体制が成立された。1982 年中等教育に関する研究指定校になり、2・2・2 制に対応した形式の「特別学習」として、中 1・中 2<グループ学習>—中 3・高 1<テーマ学習>—高 2・高 3<卒業研究>が置かれた。そして、1983 年に卒業研究が開始される。

2000 年に名称を中等教育学校に変更する。この時期に「総合的な学習の時間」が新設され、総合学習の実施に伴い、「特別学習」を「総合学習」に展開させ、<総合学習入門>—<課題別学習>—<卒業研究>の体制を確立した。

3.2 卒業研究の体制と特徴

総合学習のカリキュラムは系統的で、学年段階が上がるにつれ学習も進化していくように設計され、最終的に卒業研究という個人研究として仕上げていく体制である。

中 1・中 2 の<総合学習入門>では、教科学習では学ぶことのできない課題に取組み、読み書きの基礎的な力の育成を重視している。学年やクラス及びグループ単位でフィールドワークなどを行い、調べ方・まとめ方・発表の仕方などの学習方法の基礎を学び、1,600 字程度の報告書や感想文などを書くことになっている。

中 3・高 1 の<課題別学習>では、中 1・2 年の学習の深化を図るために、様々な分野の十数個の講座の中から二つの講座を通年で受講し、毎年、グループまたは個人で課題学習に取り組む。その二つの講座において、一つは文献調査を中心としたもの、もう一つは物づくり・作品創作を中心とした講座を選択することになっている。

高 2・高 3 の<卒業研究>では、これまで学

んだことを発展的にまとめて発表する体制になっている。高校 1 年生の 1 月に自分の興味関心を中心にテーマを決定して、個人で論文・作品の形で仕上げる。

卒業研究のテーマの分野は多岐にわたるが、主に社会福祉・教育・健康及びスポーツ・大衆文化に関連するものが多い。近年のテーマの例を見ると、「10 代に受け入れられるヒット曲とは?」「幼児のためのアロマでラビー計画」「中学生におけるメンタルトレーニングの作成と実践」など、高校生が問題関心を持ち、解決できるようなテーマを選定する特徴が見える。

卒業研究のカリキュラム上の位置づけは、学校設定科目として、高校 2 年・高校 3 年に各々 1 単位が割り当てられた必修科目であり、科目名は「卒業研究」である。「総合的な学習の時間」と外して、教科成績と同じように 5 段階の評定を行っている。

卒業研究のスケジュールは表 1 の通りである。

高 1	1 月 約 2 週間	学年全体 ガイダ ンス	ハンドブックの配布 生徒が全校の教員と相談しながらめぐりテーマを決める、 「教員めぐり」が行われる	
		テーマ 決定		
高 2	夏休み ~12 月	グループ 分け	各グループに生徒 8 人程度 分けられる 各グループに教員 3~4 人	
		担当教員 決定	グループ内の教員 1 人が生徒 各自の担当教員になる	
		研究開始	月 1 回 (7 時間目) の指導日 に経過報告	
		研究活動	文献調査、フィールドワーク、 体験学習など	
高 3	1 月	中間報告	グループごとに各自 5 分ほど の口頭発表 「中間報告書」提出	
		4~7 月	執筆開始	章立て、論文執筆を始める 研究の仕上げ、まとめを行う
		7 月	論文 (作品) 提出	論文：16,000 字以上 1 学期の終業式の日に一斉に 提出
		9 月	最終口頭 発表会	グループごとに各自 5 分程度
		9 月	文化祭： 作品の展 示、口頭 発表	全作品の展示、10 名程度によ る口頭発表
		講習会	最終指導日に担当教員が講評 する	
保管	優秀作品は教務部が保管			

表 1 卒業研究のスケジュール

A校の卒業研究の特徴として、1年半以上という長い期間をかけて実施される点、生徒の個人的な学習と集団学習とのバランスを図っている点、体験及び活動中心の探究活動を重視する点、16,000字の論文作成(必修)やものの制作(選択)という重い学習課題が果される点を挙げる事ができる。

3.3 質問紙の構成

以上を踏まえて、質問紙の調査項目を表2のように作成した。

<p>【調査項目】(丸括弧は質問番号)</p> <p>①テーマ設定のプロセス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テーマ選択の動機 (Q1) ・興味・関心の有無 (Q2) ・テーマ選択と教員以外との関係 (Q3) <p>②文献資料の利用現況</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文献資料及びウェブサイトの数 (Q4) ・文献資料の入手方法 (Q5) ・卒業研究に関わっての学校図書館の利用現況 (Q7) ・参考図書及び参考ウェブサイトのリスト (Q6, Q8) <p>③文献調査以外の研究方法 (Q9)</p> <p>④論文作成及び発表の指導現況 (Q10)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・論文の構成法 ・文献引用及び図・写真・表の入れ方 ・参考文献目録の作成法 ・口頭発表のしかた <p>⑤教育的効果に対する生徒の自己評価 (Q11)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究遂行に必要とする学習能力 ・態度(自己効力感, 根気) ・社会性 ・総合的な問題解決能力 <p>⑥卒研遂行における難しさ→自由記述 (Q12)</p> <p>⑦卒業研究と進路との関連性→自由記述 (Q13)</p>
--

表2 質問紙の調査項目

4 調査の結果及び分析

この質問紙調査は、都内の中高一貫A校と連携し、実施したものである。調査対象は、2012年度の卒業研究の論文を執筆した高校3年生で、A校の62回卒業生(2012年3月卒業)にあたる。調査日は2012年1月10日であり、A校の協力を得て、校内で一斉に質問紙調査を実施した。回答数は、執筆者111人のうち107人であり、有効回答数は105である。

4.1 テーマ設定プロセス及び研究方法

まず、テーマ設定のプロセス上の特徴を探るため、生徒が研究テーマを決める前に、やりたいことがどの程度あったかを調べてみた。図1は、調査結果を、有効回答数105のうち、それぞれの回答数を百分率で表したものである。やりたいことがあったと肯定的な回答をした生徒(「やりたいことが複数あった」ないし「一つあった」や「漠然とはあった」)の比率は74.3%であり、卒業研究に生徒全員が取り組むにあたって、ほぼ3/4の生徒にテーマへの興味・関心が形成されている状況が見える。

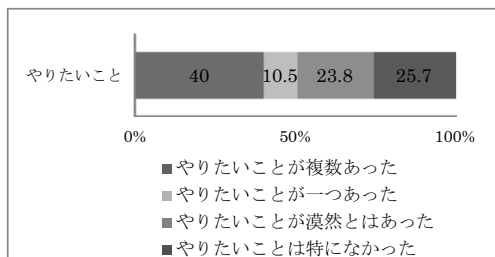


図1 興味・関心の有無

次に、研究動機について分析する。質問の選択は生徒を取り巻く学校内・学校外での様々な教育的環境を表すもので、以下の通りである。

- 1 教科(国語, 公民, 地理歴史, 理科など)での学習
- 2 総合的な学習の時間や部活動, 夏休みの自由研究など教科以外の学習や活動
- 3 日常生活や日常会話での興味または学校外での経験
- 4 テレビ・ラジオ・新聞・雑誌などのマスメディア
- 5 読書
- 6 ウェブサイト・ブログ・掲示板などのインターネット媒体
- 7 その他

図2を見て分かるように、研究テーマに興味を持つきっかけは、「日常生活や日常会話での興味または学校外での経験」が54人(以下単位省略)で圧倒的に多い。次いで「マスメディア」は11, 「教科以外の学習や活動」は8, 「教科での学習」5, 「ウェブサイト・ブログ・掲示板などのインターネット媒体」は4, 「読書」2

の順に続く。「その他」21のうち，“趣味”と記入した例が10，“自分がやっていること”3，“先生との相談”2，“進路との関係”2の回答があり，“家族からの影響”や“もともと好きなこと”などがあった。

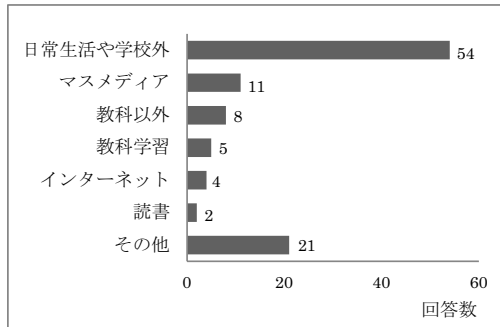


図2 研究動機

この結果で注意をひくのは、生徒の興味・関心が、「日常生活や日常会話での興味または学校外での経験」といった、学校外の経験や日常の中で生徒の興味・関心の現れが他の回答項目に比べてはるかに多いことである。「その他」の回答の例においても、趣味や自分がやっていることや家族からの影響など、生徒は私的で日常的なものに対する関心が高い。

ここから、卒業研究に取り組む高校生は、自分自身にとって身近なものをテーマにして、研究を通して、自分の体験を意味ある経験にしようとする傾向が高いことが分かる。しかしながら、A校の総合学習の学びの内容は、日常生活の中では出会い難いものを探究するものであったが、卒業研究の段階に入っては、教科学習や総合学習を深化・発展させる課題に取り組むよりは、私的な経験や認識を中心としたものに移行し、これまでの学びの内容から離れてしまう傾向があることが窺える。

また、テーマを選ぶ際、教員以外の相談の相手は誰かについての調査結果を分析する(図3)。

教員以外の相談の相手は「親」が36で一番多く、次に「校内の友人や先輩」は29、「兄弟姉妹」17、「学校外の友人や先輩」5、「本校の司書や職員」3、「祖父母」2、「外部の専門家」1の順であり、「ツイッターなどのSNS」や「インターネットの相談室や掲示板」は0である。

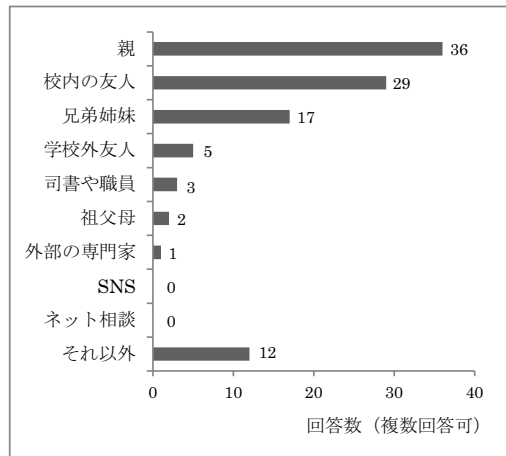


図3 テーマ決定時の相談の相手(教員以外)

「それ以外」の12のうち，“教員以外はない”と回答したものが10件あり、これによって、高校生にとって、テーマ決定に関わった相談役はだいたい教員や家族、校内の友人や先輩などが多く、それ以外はほとんどいない事情が見える。そして、テーマ選択において教員以外の相談の相手として家族が数多く挙げられているのも研究動機についての分析結果を裏付ける。

最後に、文献探索以外の研究方法について分析する(図4)。文献探索は、他の質問で調べたので、この質問項目には文献探索以外の研究方法を取り上げた。得られたデータは3つのカテゴリーに分けて整理した。

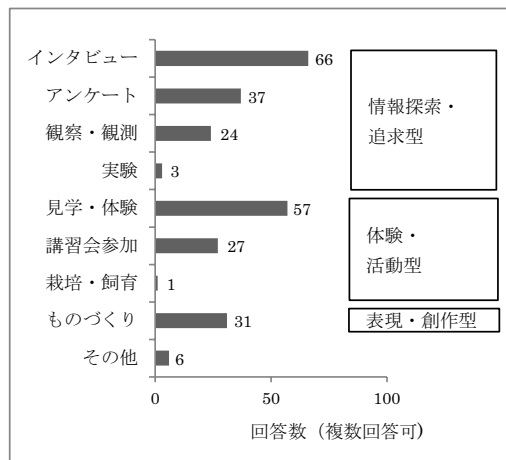


図4 文献調査以外の研究方法

1つ目の「情報探索・追求型」というのは、課題解決に必要な情報を収集するための調査法や観察、実験などの活動を行う研究手法（選択技は①観察または観測する ④生物・化学・物理の実験をする ⑦話を聞いたり、インタビューをしたりする）を指す。2つ目に、「体験・活動型」というのは、見学、体験、講習会や講演会への参加、栽培、飼育などの実際の体験を通じた理解を重視する研究手法（選択技は②栽培または飼育する ⑤現地で見学や体験をする ⑥講習会や講演会に参加する）を意味する。3つ目の「表現・創作型」としたものは、ものの制作や創作、あるいは実演などの表現及び創作活動を通して課題を解決する研究手法（選択技は③ものや作品をつくる）を指すものである。

調査の結果、「インタビュー」が66で一番多く、「見学・体験」は57、「アンケート」37、「ものや作品づくり」31の順で多かった。「その他」では、「実際に指導を行う」などの実施調査が4あり、「実験者を立てて調査」などがあつた。

この結果に見られる A 校の卒業研究における探究型学習は、体験的な探究活動を重視しつつ、必要な情報を自己主導的に探索・収集して、課題の解決を模索するという特質を持っているとすることができるだろう。特に、情報収集の主な方法として、「情報探索・追求型」のインタビュー、アンケートのような調査手法や、「体験・活動型」として見学・体験の研究手法が多く用いられることは、A 校の卒業研究が、文献から得られる知識と自分が生成した新しい情報との統合を図りながら、教室を超えて現実社会の人々との協力を通じた探究活動を追求していることが窺える。

4.2 文献資料の利用現況

文献資料の利用状況については、卒業研究のために利用した文献資料及びウェブサイトの数、文献資料の入手方法、学校図書室の利用状況を調査した（図5）。

まず、「目を通した本の数」は1～5が42%、6～10が36.4%であり、「そのうち精読した本の数」は1～5が63.8%で一番高い比率を占めている。「雑誌の記事や論文の数」の場合、1～5が50.5%であるが、6～10が15.2%、11～20

が10.5%である。「使用したウェブサイトの数」では、ウェブサイトを通じた文献が本や雑誌の記事や論文より多数利用された。そして、「新聞記事の数」においては、新聞記事の利用率は、本や雑誌の記事や論文、ウェブサイト利用率に比べて全般的に低調であるのが分かる。

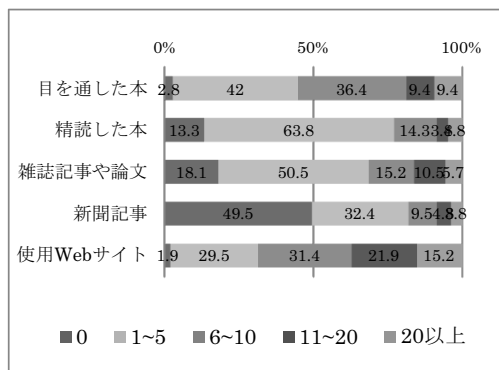


図5 文献資料の利用状況

	入手方法	回答数
1	公共図書館	64
2	書店	47
3	インターネット上の論文	35
4	本校の図書室	33
4	自宅にある資料	33
6	Google・Yahooなどの検索ページ	31
7	教員から借りる	25
8	インターネット書店	20
9	インターネット上の電子書籍	18
10	公共図書館・大学図書館以外の図書館	10
11	大学図書館	4
	その他	2

(複数回答可)

表3 文献資料の入手方法

次に、文献資料の入手方法についての調査結果を見てみよう（表3）。生徒たちは「公共図書館」や「書店」、「インターネット上の論文」、「本校の図書室」を通して文献資料を手に入れていることが分かる。だが、文献資料を入手するため A 校の図書室を利用したと回答した数は33で、公共図書館を利用した人の半数程度であった。

この質問に関わって、卒業研究のために A 校の学校図書館に備わっている学習資料の利用現況について調べた (図 6)。生徒が卒業研究に取り組む際、学校図書館が提供しているツールやデータベースを利用して、必要な情報・資料を求めているかについて調べるものである。

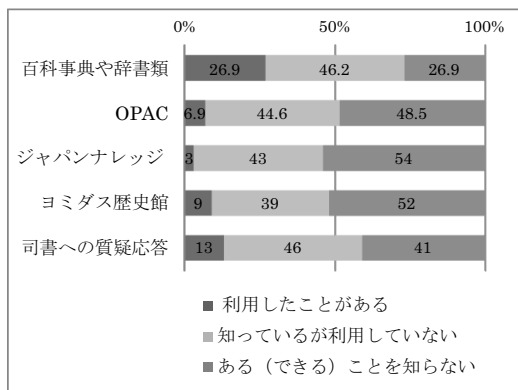


図 6 学校図書室の資料利用の現況

調査の結果を見ると、書架にある「百科事典や辞書・事典」の利用率が他の資料の利用率に比べて一番高い。とはいえ、利用率はせいぜい 26.9% であり、「OPAC」や「ジャパンナレッジ・プラス」や「ヨミダス歴史館」においては「知っているが利用しない」と「知らない」という回答が 90% を上回る。また、専任の司書が配置されているにもかかわらず、司書への質問をしたことがないと回答した比率も 86% である。

以上により、A 校の卒業研究の遂行に関わっては、学校図書館の利用は低い水準にあると言うことができるが、これは、学校図書館の活用の諸般事項に関する教育があまり実施されていないこと、また、調査時点で卒業研究指導カリキュラムにおいては学校図書館が密接には関与していない状況であったことが指摘されるだろう。

4.3 教育的効果

卒業研究の教育的効果に対する生徒の自己評価を明らかにするため、主に学習指導要領の「総合的な学習の時間」を考慮し、卒業研究の教育的効果の評価項目 (表 4) を作成し、これ

- ①課題を具体的に設定することができた
- ②適切な研究方法を用いて研究を行うことができた
- ③様々な文献資料から研究の素材を探ることができた
- ④素材を適切に選択したり整理したりすることができた
- ⑤論理的に一貫しているまとまった文章を書くことができた
- ⑥自分の研究内容を口頭で効果的に伝えることができた
- ⑦ねばり強く研究を進めることができた
- ⑧自分でも何かができるという自己肯定感を持つことができた
- ⑨社会性を身につけることができた
- ⑩課題に対して総合的に思考し判断し、問題を解決できた

表 4 自己評価項目表

らについてどれだけ当てはまっているかを 4 段階 (「よく当てはまる」「少し当てはまる」「あまり当てはまらない」「まったく当てはまらない」) で生徒に尋ねた。

図 7 を見て分かるように、口頭発表を除くすべての項目において、半数をだいぶ超える生徒が肯定的な回答を寄せた。

まず、情報活用能力に関わる項目において、「素材を適切に選択したり整理したりすることができた」は 74.7%、「様々な文献資料から

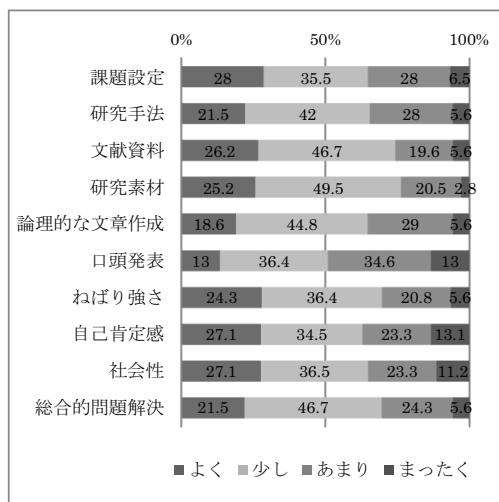


図 7 自己評価

研究の素材を探すことができた」は72.9%の肯定的回答（「よく」と「少し」の合計）であり、半数を超える生徒の中で、卒業研究を通して自分が研究の素材をうまく選択し処理できたという認識が形成されているのが分かる。

また、課題の設定や、論理的文章の執筆、研究方法の選択などにおいても、60%を超える肯定的回答があった。そのなかでは、「自分の研究内容を口頭で効果的に伝えることができた」は49.4%であり、口頭発表に対しては比較的低く評価されている。

次に、図7における心理的な自己評価の項目について言及する。卒業研究のように、長期にわたり個人研究に取り組む学習において、「ねばり強く研究を進めることができた」は60.7%、「自分でも何かができるという自己肯定感を持つことができた」は61.6%の肯定的な回答を寄せた。また、「社会性を身につけることができた」は63.6%の肯定的な回答である。生徒たちは、他者の協力を得ながら、ねばりづよく種々の調査活動や地域コミュニティへの参加をしながら自分の研究を進めていっており、それによって肯定的な認識を持つようになったと考えられる。

最後に、「課題に対して総合的に思考し判断し、問題を解決できた」が68.2%の肯定的な回答をしており、総合的な問題解決能力を得たとしている。

以上の調査は、卒業研究の論文や作品に対する客観的な評価ではなく、研究に求められる様々な能力を、卒業研究を遂行した生徒自身のどの程度身につけたかについて、自己評価した結果であることには留意が必要であろうが、これらの学習成果に対する肯定的な自己評価は、これからのある課題に対しても自分が成功的に遂行できるという自己効力感（self-efficacy）を持たせるにつながることをも念頭に入れるべきであろう⁸。そして、多くの研究で、生徒の持つ学業的自己効力感と成績やパフォーマンスなどの学業的成就とは正の相関があると検証されていることから⁹、A校の卒業研究は一定の教育効果を持っていると言うことができるだろう。

4.4 抱える課題

卒業研究への取り組みには様々な難しさがある。それを生徒たちに自由記述の形式で回答してもらい、類似した回答別に整理し集計をとった。さらに、得られたデータを卒業研究のプロセスにそって分類したうえ、回答が多い順で整理したのが図8である。

A校の卒業研究のプロセスは、(1)「テーマを決める」(2)「必要な情報を探索し整理する」(3)「論文及び作品を制作する」(4)「共有する」、という4つの段階の構成で捉えられる。

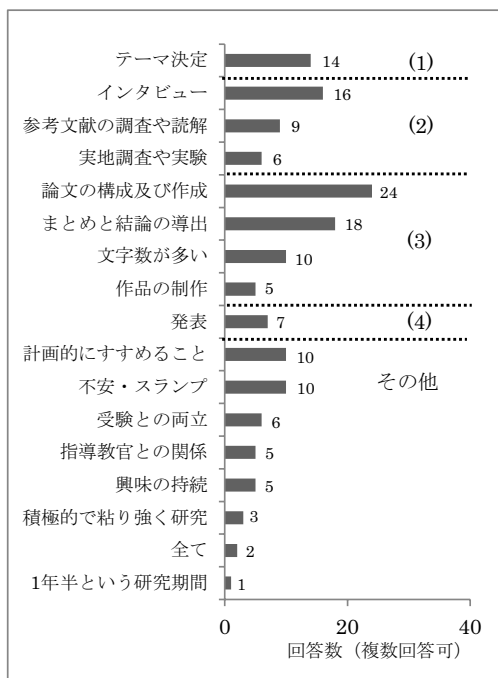


図8 卒業研究の難しさ

図8の調査結果を分析する。まず、(1)「計画を立てる」段階では、卒業研究の大変さや難しさとして、14回答が「テーマの決定」を挙げた。このような卒業研究におけるテーマ選定の重要性や、テーマ決定の難しさは、多くの報告書で指摘されてきているが、A校の場合、一旦テーマを決定すると変更できない体制であるため、テーマ決定の重要性は他校より大きい。

次に、(2)「情報を探索し処理する」段階で

は、〈インタビュー〉16、〈参考文献の調査や読解〉9、〈実地調査や実験〉6 があり、執筆者は既存の知識及び先行研究の探索や読解において困難を感じたことが分かった。また、自分のテーマに関連する文献がなかったという回答があり、テーマを選定する段階で、テーマに関わる情報を探索する必要性が示唆された。そして、インタビュー・実地調査・実験など生徒が自ら新しい情報を生成して記録することに難しさがあることが分かった。ところで、このような認知的領域のみならず、執筆者は、情動的・行動的領域に関わる大変さをも経験する。“（インタビューで）他人とのふれあいがこわかった”、“インタビュー調査が研究になれるか不安だった”、“実地調査・実験に費用や時間や体力がたくさんかかった”などの記述がほぼ1/3を占めていた。

そして、(3)「制作する」段階では、〈論文の構成及び作成〉24、〈調べたことをまとめることや結論を導出すること〉18、〈文字数16,000字が多い〉10、〈ものや作品の制作及び授業などの実施〉5であり、高校生の執筆者がこの段階で最も大変さを感じており、特に、論文を書くことに対する困難さを打ち上げているのか分かる。

A校の総合学習における「書くこと」に関しては、〈総合学習入門〉と、〈課題別学習〉期で、約1,200字から4,500字までの文章を書いてきて、「卒業研究」で16,000字の論文を制作する。これについて、調査結果を見ると、執筆者たちは〈総合学習入門〉や〈課題別学習〉で学んできたレポートなどの書き方と、16,000字の卒業「論文」の書き方は異なると認識しており、論文を書くことに対して大きな負担を感じていることが窺える。

最後に、(4)「共有する」段階では、〈発表〉7があり、その難しさとして、発表原稿やパワーポイントのスライドの作成が難しかったという回答があった。

続いて、以上の(1)～(4)の各段階には当てはまらない回答を挙げる。行動的領域としては、〈計画的に研究をすすめること〉10、〈積極的で粘り強く研究すること〉の難しさが10あり、情動的領域としては、論文になるか、オ

リジナリティーが確保できるかという〈不安やその不安で陥るスランプ〉10、〈興味の持続〉の難しさが5ある。他に、卒業研究の体制と関係したものとして、〈指導教官とのコミュニケーションや関係〉5、〈受験との両立〉6、〈全て〉2、〈1年半という期間〉1、という回答がある。

上記のことを踏まえて、A校の卒業研究カリキュラムが抱える課題は、次のようにまとめることができる。1つ目に、高校生に書かせる「論文」の作成法についての教育上の目標や指導方法をより明確に立てることである。2つ目に、卒業研究といった非常に個人的な学習に取り組む生徒が色々な場面で経験する不安や負担を解決するための情動的な支援の必要性が示唆される¹⁰。3つ目に、テーマ選定時にさまざまな情報を探索できるようにしておくこと、そして、情報の探索及び利用と評価に関する教育が整備される必要があるということである。

5 まとめと今後の課題

以上、A校の卒業研究は、現実社会との連帯を意図した体験的な探究活動を重視する特徴をもち、卒業研究に取り組んだ生徒たちにとって自己主導的な学習を行ったという肯定的評価に結びつく教育効果をもつことが分かった。抱える課題としては、論文作成についてのより明確な指導法の確立、テーマ設定や情報の探索・利用時に必要な情報リテラシーの育成、学習過程全般にわたる情動的支援の必要性が示唆された。

今後さらに精緻な調査結果を得るためには、文献利用及び学校図書館利用の低調な現状と卒業研究遂行上の困難との関連性を分析すること、そして、高校生生徒の自己評価と実際の学業成績との相関度を把握することが必要である。

[付記] 本研究は、東京大学大学院教育学研究科学校教育高度化センター「社会に生きる学力形成をめざしたカリキュラム・イノベーション」〈基幹学習ユニット〉の一環として行われた。

注

- 1 森俊二“できるか「総合」,総合学習と「自治」
『高校生活指導』 vol. 155, 冬号, 2003, p. 6-11.
- 2 高橋亜希子『総合学習を通じた高校生の自己形成』東洋館出版社, 2013, p. 24-25.
- 3 村川雅弘 “創造的に考える探究学習” <浅沼茂編著『「探究型」学習をどう進めるか』教育開発研究所, 2008> p. 48.
- 4 桑田てるみ編著『思考力の鍛え方』静岡学術出版, 2010. 日本図書館協会学校図書館部会第40回夏季研究集会京都大会報告書『探究型学習と学校図書館』日本図書館協会学校図書館部会, 2011-08.
- 5 高橋亜希子 “卒業研究過程における高校生の継続的な変化—生徒から見た高校総合学習の意義と課題”『カリキュラム研究』16号, 2007, p. 43-56. 大貫眞弘, 竹林和彦 “高等学校段階における卒業論文カリキュラムの検討”『早稲田教育評論』vol. 25, no. 1, 2011, p. 173-184.など.
- 6 大貫眞弘, 竹林和彦, Ibid., p. 173.
- 7 3つのカテゴリーは, 牧昌見ほか『高等学校における総合的な学習の時間のカリキュラムに関する研究』総合的学習研究会, 2000, p. 79の, 「体験・探究型学習活動」「表見・表出型学習活動」「知識受容型学習活動」を参考にして, 筆者が提示したものである.
- 8 荻谷剛彦 “東大附属で学んだことの意味” <東京大学教育学部附属中等教育学校編『学び合いで育つ未来への学力』明石書店, 2008 > p. 170-174.
- 9 例えば, Shell, Duane F. and Colvin, Carolyn and Bruning, Roger H. “Self-efficacy, attribution, and outcome expectancy mechanisms in reading and writing achievement: Grade-level and achievement-level differences,” *Journal of Educational Psychology*, vol. 87, no. 3, Sep, 1995, 386-398. がある.
- 10 卒業研究と同様に, 探究型学習も非常に個人的な (highly individual) 学習であり学習上の難しさがある。探究型学習を学校教育の中で実施している北米の場合、多くの研究や報告書では、探究型学習における情緒的支援の重要性及びその教育的効果を指摘している。主要文献としては、Alberta Learning, *Focus on inquiry: a teacher's guide to implementing inquiry-based learning*. Alberta, 2004. と Kuhlthau, Carol C. and Maniotes, Leslie K. and Caspari, Ann K. *Guided inquiry: learning in the 21st century*, Westport, Conn.,

Libraries Unlimited, 2007.などを取り上げられる。

A Case Study of High School Students' Graduation Research:

Using a Questionnaire Survey in a Secondary School

Younghui CHOI[†] Akira NEMOTO[†]

[†]Graduate School of Education, the University of Tokyo

This paper examines the circumstances of inquiry-based learning and analyzes students' problems in conducting 'graduation research', which is implemented in connection with 'integrated studies' in school curriculums. In the study, we selected a school which graduation research required for high school graduation, and conducted a questionnaire survey targeting learners who had done such research. The survey results revealed that inquiry-based learning for graduation research emphasizes inquiry activities and experiential studies designed to encourage solidarity with the real world, and that graduation research has an educative effect connected with learners positively evaluating the fact that they had performed self-directed learning. The results indicated the necessity for affective support throughout the learning process, establishing a method for instructing students in writing papers, and the development of information literacy when defining research questions, and searching for and using information.

Keyword: Graduation Research, Inquiry-based Learning, Integrated Studies

